

[dōnik]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siegf : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 35 janvier 1996 SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

新日仏会館で「全国日仏協会の集い」 各地の貴重な経験を交流

「全国日仏協会の集い」は、去る11月9日、今春落成した東京・恵比寿の日仏会館で開催され、全国から26（37協会中）の協会、約60人が参加して終日精力的な会議を行いました。三重日仏協会からも3名が出席しました。ホストの日仏協会からのあいさつに続いて、フランス大使館側から、1. テスタール経済商務公使 2. モリーユ文化参事官 3. 鎌田広報アタシェの三氏が、日仏関係の強化のための、それぞれの分野での大使館の活動について報告されました。

続いて、現在建設中の『パリ日本文化会館』の初代館長に決まっている磯村尚徳氏が、同館の設立趣旨や進捗状況、今後の抱負などを話されました。それによりますと、同館はエッフェル塔に近く、地上6階、地下5階、大中小ホール、展示場、教室、図書室（蔵書5万冊）、庭園、レストランなどを備え、日本の海外における中心的な文化施設をめざしています。94年6月起工し、96年7月の竣工を予定していましたが諸般の事情から工事が遅れ、『日本年』である97年の遅くとも秋までには完成させたいそうで、そのときは日仏協会関係者の積極的な利用を歓迎するとのことでした。

このあと、出席者の討議に入り、各地の活動経験や悩みなど活発な発言が相次ぎましたが、その中で……

山梨日仏協会 甲府市・ポー市の姉妹提携20周年を記念して訪仏を予定していたが、フランスの核実験再開で実施に批判の声がおこった。しかし、むしろこの問題に向こうで話し合おうと予定通り60人の使節団が訪問したところ、ポー市は市長を含めて75%が実験反対で、いっしょにデモ行進もやり大いに友好を深めた。

そのほか、会員の高齢化、若い人たちのフランス（語）離れなども指摘されておりましたが、特にフランス人居住者の少ない地方で、その日仏協会がいかにか「フランスのプレゼンス（存在感、迫力）」を市民に与えていくかが肝要だという意見もありました。

三重日仏協会は、このような地方の各協会が互いに情報を交換し、協力し合っていける態勢がほしいと呼びかけました。

会員のページ

私のパリ

武村泰男

歴史や文学のなかでの出来事と地理とは私たちの心のうちで離れ難く結びついています。播州赤穂といえば誰でも忠臣蔵を連想し、一度は行ってみたいもの、と考える。そして赤穂の城跡に立ってみると、松の廊下での浅野内匠頭の刃傷や本所松阪町の吉良屋敷への討ち入りを思い浮かべてそこはかとなない哀愁と感傷にふけるわけがあります。

忠臣蔵ほど普遍的でなくとも、私たちはみなそういう独特の感情とつながった場所をもっています。例えばパリと言ったらみなさんはどういう思いにつなげるでしょうか。

私は曲がりなりにも哲学の徒ですので、きっと、実存主義とサン・ジェルマン・デ・プレ前の広場とか、パスカルとポール・ロワイヤル修道院という結びつきを考えるだろう、と思われるかも知れませんがさにあらず、パリとなるとなんといいてもアレキサンドル・デュマの『ダルタニアン物語』三部作であります。大学に入ったころに本邦初訳の第二部『二十年後』第三部『ブラジュロンヌ子爵』と出始めたので、それまで第一部『三銃士』しか知らなかった私は驚喜したものです。

それ以来、リュクサンブール公園は無双の剣士ダルタニアンがしばしば決闘を行ったところであり、パレ・ロワイヤルはルイ・13世やアンヌ・ドートリッシュに接したダルタニアンの恋と冒険の舞台以外のものではありませんでした。ポン・ヌフもまたわたるときはいつでも17世紀のポン・ヌフでありました。

中学・高校時代に私と同じように『ダルタニアン物語』の虜になった娘には、「オー、足が……」と言っただけでダルタニアンの親友ポルトスの晩年のように膝が痛いのだとわかるし、「今朝はカカオか」と言えば、ダルタニアンが親友アラミスの家で出されてうんざりした卵とほうれん草のかき混ぜという坊さん臭い料理だということが通じます。もっともあまりこれをやると『ダルタニアン物語』に興味を持たない家内がやきもちを焼きますので自粛していますが。

昨今は核実験の強行で著しく評判の悪いフランスですが、私にとってのパリはまずもって17世紀のパリ、次いでエコール・ド・パリ、ムーラン・ルージュのそれでありますので、いつまでも懐かしく郷愁をそそるパリなのです。

日仏シンポジウムに参加して

伊藤達雄(三重大学人文学部)

去る12月4日(月)、「パリと東京の大都市圏を考える」というColloqueが開催され、久しぶりに東京の日仏会館を訪れた。御茶の水の古い会館は、恵比寿のガーデン・プレイスに隣接した瀟洒な建物に替わっていた。

Colloqueは、日本地理学会の都市地理学研究グループがフランスの学者10名を招待して開催されたもので、約50名ほどの仲間たちが集まった。フランスは、お隣のドイツの系統地理学とはかなり色彩の異なる地誌学派と呼ばれる学派の本家で、地理学は、フランスが世界に植民地を広げていたときから国家学として古い伝統をもち、現在も都市計画や地域計画に地理学者が大いに活躍しているお国柄である。今回もシラク大統領のブレーンを勤めるソルボンヌ大学のクラバル教授など著名な学者が揃い、私も旧知の友人たちと久しぶりに会うことができ、パリと東京の現状と将来をテーマに有益な知識の交換ができた。

私は、昨年まで、国土庁の首都圏基本計画フォローア

ップ委員会の副座長をつとめていて、その報告書がつい最近「21世紀の新たな首都圏の創造」(大蔵省印刷局刊)という本になったので、その内容を紹介するよう依頼されて、約1時間、講演させてもらった。残念ながらフランス語は私にとって英語・独語にぐ第3外国語なので、英語で勘弁してもらい、ペーパーも英語で書かせて頂いた。

英語の達者なクラバル教授とも大都市圏政策を巡って議論をしてみた。日本では東京一極集中が問題となっているが、フランスもパリ一極集中の国なのに、それは大きな政策課題ではないようで、むしろECの中でロンドン、アムステルダムなどどのように機能分担しながら主導権を獲得していくかが問題だということであった。

パリがECの中でどのように変わっていくのか、東京がアジア太平洋地域でどんな役割を果たしていくのかなどを、改めて考えさせられたColloqueであった。

1995.12.6.記

カンヌの日仏協会

清水 一男

95年2月、フランスのカンヌに三泊して、南仏の観光地を訪れる機会があった。二月というのに小春日和のように暖かく、若い人は半そでシャツ、年配のご婦人は毛皮のコートを着込んでおり、四季が同時に存在しているようだった。

そんなカンヌで、「うちの飼犬が阪神大震災フランス救援隊と一緒に、日本で捜索活動に加わった」というフランスの女性に出合った。しかも、その人はカンヌ日仏協会の会員であった。

カンヌ市と静岡市は、1989年9月に、姉妹都市の提携を結んでおり、私達は、静岡市に住む娘夫婦にすすめられツアーに参加したのであるが、行程のポイントとして「ゴッホ、セザンヌ、シャガール縁りの土地」を見て回ることに、「国際交流の夕べ」が組まれており、この二つに興味を持ったからである。

国際交流の夕べは、ツアー最後の夜、カンヌ市のホテル・マルチネスで開かれ、カンヌの副市長が臨席、歓迎の挨拶をされた。日本人30名、フランス人10名ほどが集い、カクテルパーティーが始まった。一人の婦人が話しかけてきた。良くわからないので困っていると、彼女は名刺を差し出した。その名刺には、日本とフランス両国

の国旗が印刷されており、「カンヌ日仏協会」の文字も読み取れた。

カンヌに日仏協会が存在する。国際交流の相手が現地の日仏協会のメンバーである。名刺をもらうまで、このことを知らなかった。一瞬体が熱くなる思いがした。私の片言のフランス語がさらに固くなって機能しません。名刺を指差しながら、辛うじて「moi aussi」「moi aussi」と発した。

単語の羅列ながら会話は弾み理解できたことは、①知人が神戸にいて、阪神大震災で被害を受けたこと、②彼女の犬がフランスの救援隊に加わったこと、③友人のF・ドゥリー氏が日本のサッカーチームのコーチをしていること、④彼女の故郷は、ノルマンディのCHERBOURGという街であること、⑤そして偶然にも、彼女のお孫さんの名前と私の息子の名前が同じ“KËNICHË”であることには目を丸くした。

今では、お互いに手紙で情報交換をしていますが、フランス語の手紙を読み書きすることは、私にとって難行苦行、幸いにもダメム先生の助太刀によってフランス語に親しむ喜びを感じております。

讃・ジュリアン・デュビエ監督

吉村 英夫

先年、ある人へ書いた手紙の一節を再録させていただくことで責めを負いたい。

——どうしたことかフランス映画が好きで、なかでもデュビエに強くひかれながら映画少年として育ちました。『望郷』がいちばんはじめだったか、あるいは『舞踏会の手帖』だったのでしょうか。甘い陶酔感がありました。少し暗いのも気に入りました。ペシミズムという言葉覚えてうれしかった少年時代です。ジャン・ギャバン『逃亡者』も彼の演出で、ハリウッド映画だし、いま見れば失望するでしょうが、これまた少年の日に強い印象を持ちました。デュビエ、デュビエと思ひながら、映画雑誌に彼の名前を見つけるのが幸せな少年時代でした。ネクラな映画少年だったろうと思います。

1940年生まれの私がそれなりにデュビエを理解したのは、彼の戦後の代表作『埋もれた青春』によってです。衝撃を受けました。『望郷』なんかには、私と作品との間

にまだ距離があり、距離をおいたままこの監督に憧れていたのですが、『埋もれた青春』はまともに自分のなかにズカズカと入り込んできて影響を与えました。ヤコブ・ヴァッサーマンという作家を知り『モーリチウス事件』という原作本も読みました。誰も認めてくれない孤独な楽しみでした。認められなくてもいいと居直っておりました。

あんなにメジャーな監督であったのに、いつかだんだんとマイナーな監督になりました。時代がデュビエを置いてきぼりにしました。四大監督として覚えたのに、いつかルノアール、クレール、フェードなどの影に隠れていくのが無念で仕方ありませんでした。私は断固デュビエ・ファンに固執しようと決心したりしておりました。彼が自動車事故で不遇な死を迎えてから、急速に忘れられていってしまうなかで、俺はデュビエにこだわり続けるぞ、とひそかに考えておりました。

悲しいことに、今では私自身がルノアールやフェーデの方に軍配をあげます。じっくりと大人になって見ると、デュビエは負けてしまいます。しかし私が若かったと

一杯のワインを

フランス人は実に話好きだ。彼らの集まる所、常に派手なジェスチャーと“口角沫を飛ばす”といった風景が見られる。日本では、“沈黙は金なり”という言葉が示す通り、多弁をむしろ良しとしない伝統があるが、彼らに言わせれば「あいつは言う事を考えるだけの頭がない。黙っているのは何も考えていないからだ。」などと言われかねない。おそらく日本語では「彼は発言を控えた」と訳される文も、直訳すれば「彼は言葉を一人占めする欲ばりだ」であったりする。フランス語に、よく嘘をつく人のことを指して“彼は息をするように嘘をつく”という表現があるが、我々日本人から見れば、嘘までつかなくとも、彼らは実に息をするようにしゃべり続けるように見える。

久しぶりに古いシャンソンを聞いた。懐かしい気分に浸りながらしばらく聞き惚れていたが、美しいメロディー、軽快なリズムに乗せて語られるのは、まさしく“吐露”であると気付かされた。喜びも悲しみも絶望も、語を選び、韻を踏み、洗練されてはいるが、どれもが言葉という手段でその心情を吐き出しているかのようである。彼らにとって“生きる”とは、良くも悪くも「自分を表現し続ける」ことなのであろう。

他との違いを恐れずはっきりと自分の意志を表明する、

文丙二年半

1941年4月に津中から一浪で旧制三高に合格した。天に飛ぶ奇蹟的合格であるが、親友が二次でおちたのと、ドイツ語志望で文丙になったので少しは不満だった。4月から数カ月、古都逍遙と美酒に浮かれているうちに、週11時間のフランス語は早くも脱落。級友が夏休みにモウパッサンやゾラを読みかけている頃、まだ半過去と大過去の区別もつかぬ(?)始末。当時は10段階で6以上とらないと進級できないのに、やっとやっと4。その頃「天佑ヲ保有シ」た御方らの開戦が加わって青春にわかに薄明となる思い。妄想と自棄酒を重ねる中に2年がおわり、「こんどこそは落第させますぞ」といわれ伊吹の関のけわしかったこと。結局、軽症の肺結核と重症の脚氣それに仏

き、デュビエこそが私のたった一人の偶像であったという事実だけは私が生きる限り残るでしょう。

藤田典子

それでも日本人のように決定的な決裂になりにくいのは、“人は皆それぞれ違っているのだ”というあきらめにも似た個人主義が深く根付いているからだ。ペロー作の「赤ずきん」では(これがオリジナルなのだが)、赤ずきんは狩人に助けられることはなく狼に食べられてしまうところで終わる。人生とは決して楽観的ばかりでははいられない厳しい現実を伴ったものだという、彼らのもう一つの顔、現実主義の表れである。

個人主義と現実主義、この息の詰まりそうな緊張感を伴った人間関係の中で潤滑油の役割を果たしているのが、ユーモアとエスプリに満ちた会話であると私は思う。“人生とは、にもかかわらず笑うこと”はまさしくユーモアに救いと精神衛生効果を求めた言葉であると言えよう。

共に外国語を学ぶ皆さん、言葉は文化です。ある言語特有の表現は、その国の人々の生き方考え方を反映しています。つまり外国語を学ぶことによって、違った自己表現の方法を身につけることができるのです。とは言っても慎み深い皆さんのこと、突然口角沫を飛ばせと言われてもなかなかできないのでは。そんな方々に私は、レッスンの前に、日本的謙虚さのタグを外す一杯のワイン(量に個人差はあると思いますが)をお勧めします。

竹田友三

語欠点症をあわせて休学してしまう。ところが、数カ月にして「第三乙種」「学徒出陣」の大逆転。と思って神妙になったが、病兵で外地行きをのがれた。人間万事塞翁が頓馬。n'est ce pas?

後に東大で源氏を講じた秋山虔とか、京大で庶民文化を論じた多田道太郎、隆慶一郎の筆名の池田一朗、関空の壁画をかいた田淵安一画伯は、又台湾主席候補といわれる彭明敏は少くも6点以上とって一步先に大学に入った。宮崎大の西田次郎、新潟大の松崎文則らは仏文の教授になったのだから7点から8点は貰っていたろう。津中卒の4点豪傑は、まともには卒業せず、しかし1年おくれで京大に無試験入学したのもうフランス語で泣く必要

はない。しかし、伊吹先生が、43年11月の終講で語られた一言は決して忘れない。戦衣を着る前日の学生を前にした一語——Au revoir

しかしそれがいまだにわが胸に疼くのは、級友島津が特攻で、津中浪人以降の親友今井が津の爆撃で、再び会えぬ運命だったからである。

私とフランス語

大原里歩

1993年2月初めのある朝、私は新聞のお知らせコーナーに「フランス語入門講座」の文字を見つけました。これが、私がフランス語を始めるきっかけとなりました。

恥かしいことにその時まで、アルファベットの読み方すら知りませんでした。それで、いつかフランスに旅行する時、ほんの少しでもフランス語を知っていたらいいなという軽い気持ちで恐る恐る受講することに決めたのです。

その年2月12日から始まった入門講座に緊張しながらも楽しく通い、4月からはNHKラジオ講座を聴き、テレビフランス語会話を見ているうちに、フランス語の音がますます心地よく耳に響いてきました。大好きなバルバラが20年の時を越えて蘇ったような私の中で眠っていた何かが目を覚ましたような感じです。フランス語を学ぶことによって、いままで脈絡なく頭の中でくすぶっていたり、記憶の外におかれていたものが呼びさまされ動き出しました。

新しい世界が広がりはじめ、「フランス」という言葉にピッと反応するようになりました。フランス全土やパリの地図を広げて眺めていると時間はまたたく間に過ぎてしまいます。セーヌ河、ルーブル美術館、凱旋門、エッフェル塔……。只、この頃いつも思うのは観光の為にだけフランスを知るのではなく、フランスという国をプラスの面もマイナスの面もあるまま見つめ、それを自分の中にどう取入れていくかということです。

フランス語修得に限って言えば、いくら「語学はザルで水を汲むようなもの」と言われても、記憶力の低下、理解力の不足はどうしようもなくひどい有様で情なくなります。しかし、相変わらずフランス語を聴いたり読んだりするのは楽しいのです。

それに何より嬉しいことに、フランス語を通じてたくさんの人と知り合え、よい師を得、親しい仲間も出来ました。私にとって入門講座はまさに“Vive la France!”であったのです。

フランスバター

楯野正雄

思い出すと恥かしくなる私のバタバタ物語りですが、ご参考までにお読み下さい。

私の好物の一つにフランスバターがあります。塩気が多く、風味がない国産バターに比べ、塩味も殆ど無く、まるやかな風味が何ともいえないからです。この風味の違いに気付いたのは十年前のエールフランスの機内食を口にした時でした。パンの味といい、バターの味といい日本での味と全く違っていたので、2食目、3食目のパンとバターを持帰り、家で評価してもらうことにしました。予想通りこれは一味違うということになりました。

早速国内でフランスバターが入手できないものか、東京や大阪の百貨店のチーズの売場をのぞいてみましたが、全く置いてありません。そこで海外出張でパリに立寄ることがあれば、バターを買うことにしました。パリのスーパー例えばAUCHANでは、250gのケースが8FF(約160円)と安く、450g1200円もする国産の対抗品に比べて1/4以下です。

私が好きなフランスバターは実は無塩の発酵バターですが、これをパリの食料品店で、いろいろな種類のバターが並んでいる大きなケースから選ぶのはやはり困難でした。スーパーで辞書を引くのもスマートでないと、フランス語の発酵だけを覚えて行ったのですが、そんな文字はどこにもありません。迷って買ったのが“DEMI SEL”でした。これは半塩どころか正味の有塩バターで、風味があっても塩っぽく、食べるのに苦労しました。そこで今回はDEMI SELの表示のないものを選びました。ところがこれは非発酵バターで、パンに塗っても味がなく、仕方なく料理用に使いました。二回も続けて何故お目当てのバターが買えぬかと歯がゆい思いが続きました。今年になってやっと“DOUX”は甘口でなく塩なしであること、パンに塗るには“TARTINE”を探せばよいことがわかりました。

バターの製法には2通りあるそうです。一つは非発酵バターでクリームを発酵させずに固めたもので、“BARA-

TTÉ”の表示があります。もう一つは発酵バターで、クリームを乳酸で発酵させてからバターにするもので、強い風味を伴っています。しかしこれには何故か発酵“FERMENTÉ”の表示がありません。これが問題だったのです。

バターについては苦い思い出がまだあります。パリはピラミッド通りの角にあるカフェで朝食をとった時のことです。カフェオレとクロワッサンまでは簡単に注文できましたが、同僚はバターもほしいと言い出しました。クロワッサンにジャムならともかく、バターを塗るとはとやや軽蔑しながら“il prend du beurre”と注文しました。ところが通じません。何回繰返しても通じません。

〈ルウ・クラボ…〉のケルビーノ

94年秋、三重日仏協会がお世話して県内各地を公演旅行した南フランスの民族舞踊団〈ルウ・クラボ・ド・セミゼンス〉は、羊の毛皮を着、長い木の足を履いて荒々しく踊り回る少年たちと、可愛い民族衣装を着て花かごを手に優雅に踊る少女たちから成っており、その対照の妙もあって、どこでもたいへん好評を博したものだ。

ところでこの少年たち（と言っても二十歳を過ぎた若者もいたが）のなかに、ひときわ目を引く美少年がいた。揃いの黒いベレーの下からのぞく栗色のカールした短い髪、彫りの深い甘いマスク、激しい踊りのときには顔は上気してばら色になる。ロランス・ラガン、15歳。現地から事前に送られてきたメンバー表でも、その名は「男性」の部に記されていた。だが「彼」は実は少女だったのである。聞けば、幼い頃からこのスリリングな男踊りにあこがれて訓練をかさね、いまではじゅうぶん男の子たちに伍して、高い足で飛び回っているという、チームのアイドルだったのだ。ふだんもジーンズに綿シャツといったギャルソニエルな服装をしていて、男の子からは弟分のように可愛がられ（軽くいじめられ）、女の子たちとも陽気につき合っている、何とも不思議な雰囲気があって、ふと私はあのケルビーノを連想せずにはいられなかった。モーツァルトが創りだした最も魅惑的な登場人物のひとつ、少年なのにメゾソプラノによって演じられる『自分で自分がわからない』ほど移り気でいたずらなお小姓、フィガロから『もう飛ぶまいぞ、この蝶々』と

幸い横にいた見知らぬ婦人が助け舟をだしてくれ、やっとバターが出て来ました。小生の発音はヴェールでありブルではなかったのです。

その後フランス語の教室で、小生だけがboireをvoirに発音しているようで、何回も直されました。これでは好きなワインもvoir（見る）だけでboire（飲む）出来なくなるぞと、以後“b”の発音には注意しています。

最近わかったことですが、これまで規制により輸入できなかった外国産バターも、今年初めからやっと輸入できるようになったそうです。Doucetさんのバケツにこのフランス産の発酵バターを塗って賞味できる日が早く来てほしいものです。

井土真杉

からかわれる、ほらあの素敵なケルビーノ君である。

津での歓迎レセプションの夜、一行はこちらの割り振りにしたがい、だいたい



本番まえのロランス君

二人づつに分かれてホームステイをしたのだが、わがロランスはお目当ての親友と同じ家に泊まりたいために、本来の予定に組まれていた一人の仲間と入れ代わって、武田治美さんのお宅にもぐり込んだのである。しかもちゃっかりとその子の名札までつけて。翌日、お別れのとき、武田さんが写真を送って上げようと二人にアドレスを尋ねると、一人はすらすらと書いたのに、サンドリーヌと名乗る娘は何かぶつぶつ言って自分の住所氏名を書きたがらない。でも武田さんは、あえて詮索するのを控えられたそうである。「どうもあの子は家庭が複雑らしい」と。替え玉ステイの真相がわかって大笑いしたのは、一行の帰国後だった。

あれから一年余、あのケルビーノはスペイン国境に近い南フランスで相変わらず蝶のように飛び回っているのだろうか。それとも少しは娘らしくなったのか。

「草の根国際交流フェスタ」に参加 11/26

パネル展示とフランスパン屋台で

地域国際ボランティアの活性化をめざし、三重県国際交流財団などが主催して県女性センター周辺で開かれた同フェスタには、県下の国際交流団体が多数参加しましたが、三重日仏協会もこれまでの活動を紹介するパネル展示を行うとともに、「世界の料理屋台」コーナーでドミニク・ドゥーセの店謹製のフランスパン各種を延べ数百人の参加者に無料配布しました。このコーナーではパンのほかに、インドカレー、ギョウザ、みたらし団子、アフリカ料理、ヒマラヤ地方のお茶類なども屋台を並べ、それぞれお客が列をなす盛況でした。



'96 1/20 (土) 文芸講演会 津市・水産会館で

渡辺芳敬先生が「お里帰り」

三重日仏協会主催の文芸講演会を久しぶりに下記のように開催します。

★1月20日(土) 午後2時30分より

★津市広明町 水産会館4F (津駅西口より線路に沿って南へ徒歩3分)

★『ボルドー大学の日本語科教師顛末記』 渡辺芳敬氏 (横浜市立大学助教授)

渡辺先生は、早稲田大学大学院修士課程、パリ第一大学博士課程を修了の後、三重大学人文学部でフランス語フランス文学の教鞭をとられました。傍ら文筆活動を続けられ、91年には「群像」新入文学賞(評論部門)を受賞されています。93年に横浜市大に移られましたが、三重時代には本会会員としてフランス語入門講座の講師など、会の活動に多大な貢献をいただきました。今回は、95年ボルドー大学で日本語の教育にたずさわられた体験を中心に、お得意の映画論もふくめて昨今のフランスの事情をお話いただきます。会員以外にも呼びかけて、多数ご来場ください。入場無料。

'96 7月 トゥール市へ ホームステイの旅はいかが？

伊勢国際青年文化センターの西山源継さん(本会会員)を中心に、この夏フランスはロワール地方の大都市トゥール市にホームステイの旅をする計画が進んでおります。詳細は未定ですが、7月中旬の約10日間を見込み、現地の日仏協会がステイの世話をしてくれるそうです。費用はロワールの観光も含めて25万円をいど。旅程の一部変更も自由です。一人でも参加できますが、もし一定の希望者があれば、三重日仏協会の事業として取り組むことも考えています。関心のある方は事務局までご連絡ください。

新会員紹介

ジャン=ミシェル・マシュレ Jean-Michel MACHERET バイオリニスト

安芸郡河芸町千里ヶ丘62-3 清水みどり方

浜田 文登 勢

箏曲「勢ノ文会」家元 尾鷲市中村町8-18

編集後記

「会員のページ」の充実のため寄稿を呼びかけましたところ、武村会長をはじめ、予想をこえて多くのの方が、それぞれ質の高い興味深い随想をお寄せいただき感謝しております。皆様、熟読玩味していただくことを期待します。